

町人Aは逆ハーヒロインに狙われる

いちおう匿名。いちおう

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『町人Aは悪役令嬢をどうしても救いたい』の二次創作です。

——「何その小説」という方にはあらすじと作品レビュー（飛ばしてええよ）——

姉に無理矢理プレイさせられたファンタジー乙女ゲームの一般人モブに転生。原作ゲーム知識を使って序盤じや手に入らないようなチートスキルとかアイテムを入れ、王国滅亡を回避して家族や婚約破棄される悪役令嬢（根は優しくて真面目）を救うストーリーという王道的テンプレ物語。乙女ゲーの主人公はもちろん転生者で、悪役令嬢を陥れて逆ハームルートを目指すヤベーやつ。もちろんざまあされる。

読んだ感想としては、この小説の魅力は話の展開が丁寧で、急展開がほぼない。「前置きとかどうでもええんだよお！ざまあだけ読ませろ！」という過激派ニキには向いてないが、ざまあまでの入念な準備がちゃんと書かれている分、ざまあの達成感も高い。

すごいところに、まず学園に入るまでに約7万文字もある（すげえ）。世界観もしつかりしていて、ゲームらしい設定（ギルドとかステータスとか）がありつつも、ちゃんと伏線もあって、王道テンプレとかゲームだからでは済ませずにそうなった経緯が書かれている。特に政治結婚や婚約破棄に対する言及はちゃんとあり、主人公サイドは基本理性的。また、敵サイドのキャラ含めて心情描写が細かく、行動原理もはつきりしているので矛盾を感じにくい。（確かにアホだ

が、アホなりには考へてる笑)

王道的悪役令嬢の逆転ざまあ小説の良作だと思います。劇的な展開は少なくとも、読み応えはめっちゃあります。この小説読む前にぜひ読んでみて。

——以上小説紹介でした。簡潔にしようとしたら上から目線の文章除になってしまい申し訳ないです——

そして、以下は原作との相違点です。（原作がしつかりしてるのでちゃんと設定作りました。エライ）

・分岐点はゲームの舞台である学院入つてからのため、そこまでの冒險者時代とかはまるごとカット。（まあ初出の単語は解説入れておきます）

・エイミー（転生逆ハーヒロイン）の前世を壮絶化。具体的には、いじめが過激化して末に自殺してからの転生。その反動で、前世でいじめてきた女子たちに対して優越感を得ようと逆ハーを目指す。（原作ではちやほやされたい承認欲求）

・エイミーのアレンに対する初印象が向上。「顔も性格も嫌いな陰キャモブ」→「異様に賢いし追加攻略キャラかな？顔はまあまあだしハーレムに加えてやりたい」

目 次

(New) マイナージャンルゆえのストーリー紹介

逆ハーヒロイン、町人Aに目をつける

町人A、エイミーの態度に困惑する

町人A、ダイジエストにされる

逆ハーヒロイン、町人Aに勘違いする

悪役令嬢は平民に目をつける

22 17 11 8 3 1

(N e w) マイナージャンルゆえのストーリー紹介

＜ただのレビュー＞

なろうで人気ジャンルの悪役令嬢に転生……するのではなく、転生するのはストーリー上、どこにも登場しないモブ（通称「町人A」）。ここが乙女ゲーの世界であり、順調にストーリーが進み悪役令嬢が追放されれば母親含め地元が壊滅することに気づいた町人アレンは、ストーリーに入りし悪役令嬢を救い出し、母親と地元を守ることを決意する……というあらすじ。

ざまあ展開はあるが、溜めて溜めてからざまあるので、そこに至るまで過程を楽しみたい読者におすすめ。また、アフターストーリーも充実……というかそこからが本番と言わんばかりに話が展開するため、ざまあして終わりはちょっと……っていう読者にも安心設計。原作、読もう！（隙あれば薦める鏡）

＜あらすじ＞

乙女ゲーの舞台は学園であり、これだと学園ファンタジーラブコメのように感じるが、読み始めるとあら不思議。学園どころかヒロイン1人も出ない異世界ファンタジーが開幕。w e b版だとほぼ100話あるうちの27話もが学園開始前という大ボリューム。書籍一巻でも半分以上を占めていたりする。

なにが凄いかって、普通に面白い。内容としては対断罪イベントのための主人公強化なのだが、あんま本編に関係がないゆえに雑にしがちな部分を作者様は丁寧に描写している。ナーロツパのためご都合主義も多いが、その分ダーク要素もなくサクサク進むから気楽に読める。なんならここだけでも話完結するレベル。サブキャラにかける愛情がよく伝わってくる。あえて詳しく書かないでの、気になつた方は原作読もう。（隙薦鏡）

肝心の断罪イベントについては、王道のざまあ展開と言つたところ。実は清廉な悪役令嬢が町人Aの手助けもあり、腹黒のヒロインをざまあするもの。

断罪イベントを覆した後は乙女ゲーのシナリオから外れていく。戦争だつたり、学園が始まる前日譚に訪れた場所に行つたり、伏線を回収したりと物語が動くのはここからだつたりする。なんならファンタジーもラブコメもここから始まる。気になる人は以下略

＜人物＞

こここの二次創作は入学式からなんで、その前に出たキャラを主観たっぷりに紹介する。

・アレン

名字なし。母子家庭で育つた一人息子。乙女ゲームと気づいて死にたくないからとストーリー介入を決意。性格は元日本人とは思えないほど大胆で強メンタルだが、腹芸は苦手で若干コミュ症。舞台の世界観が基本的に野菜生活のため気にならないが、かなりの楽観主義者。

・エイミー

一般腹黒逆ハーヒロイン転生者。元平民のためアレンと同じ学園に通っていたがお互い覚えていない。学力が強化され、過去が悲惨になつた。でも性格はクズのまま。

モデルは劣化さがみん（俺ガイル）。

・その他

一切出てこない（）

逆ハーヒロイン、町人Aに目をつける

あたしはエイミー、この世界のヒロインよ。

下町で貧乏暮らしていたけど、色々あつて2階ベランダから落ちかけた時に突然記憶が戻ってきたの。

それで気づいたのよ。この世界は前世のあたしにとつて心の支えだつた乙女ゲームの内一つ「マジカル☆ファンタジー～恋のドキドキ♡スクールライフ～」の舞台で、あたしはそのヒロインだつて。

あたし、前世は中学高校共にいじめを受けてたんだよね。理由は顔がキモいとか声が汚いとかマヌケとかノロマとかブスとか言いたい放題でさ。女子どころか男子にも言われてきたし、嫌がらせ落書き暴力なんでもあつたわ。高校に入つたら終わるかなと思つたらむしろ激化して、一時期の氣の迷いで自殺しちゃつた。思い出してからは結構後悔したわ。だつて自殺したのは好きな乙女ゲームの追加DLC発売日前日だつたし。あーあ、プレイしたかつたなあ…。

とまああたしはこんなかんじで大の乙女ゲー好きで、暇さえあれば乙女ゲーをやつていたの。乙女ゲーの中でならあたしは綺麗な子で、みんなにちやほやされる。そして、いじめ云々は乙女ゲームを支えにしてたら案外へーきだつた。

中でもこのゲームはサブルート含め100周くらいはした結構なお気に入りだつた。ていうか買いたかつた追加DLCもこのゲームだし。なんならいじめで死んだショックより乙女ゲーのDLC出来なかつたショックの方が大きかつたわよ。

ま、だからあたしはこの世界に転生できたのかもしれないけど。神様が、かわいそうなあたしに第二の人生として乙女ゲーのヒロインにしてくれたに違いないわ。

それにして本當、ご褒美よね。

あたしの推しはカール様だけど、他のイケメンたちも逆ハールートさえ選べばみんなあたしを愛してくれるのよ？ 逆ハールートはカール様ルートがメインだし、選択肢は全部暗記してるから違えたりなんかしないわ。

乙女ゲーのくせに難易度は相当高くて、でも課金はアイテムとかはたくさんソフト買っててお金なかつたからできなかつたけど、その分時間をかけて攻略したんだもん。スクロール縛りプレイでも楽勝なのよ、あたし。

しかもルートをクリアしたらあたしは光の精靈に祝福された慈愛の聖女様よ？あーあ、前世のいじめてきた奴らに今のあたしを見せてやりたいわよ。

まあだからこの後の展開は容易について、普通に暮らしてたら、やつぱりその通り！

原作通り、あたしはブレイエス男爵の娘だつたことが分かつて男爵家に引き取られたわ。しかも、【癒し】の加護もつていることがわかつたの。

ふふ、貴族とかはどーでも良いけど、この光景をいじめてきた奴らに見せてやつたらどんなに気分が良いかしら？ブスとかゴリラとか散々言われたあたしが貴族のご令嬢で聖女様の卵よ？

あー、もう。笑いが止まらないわよね。せつかくだし、難易度が1番高い逆ハールートでも目指してみようじゃないの。

勉強は前世よりは簡単だつたけど、前世では勉強道具なんて落書きとか盗まれされ放題だつたし、まともにしてないから少し苦労したわ。まあどうせ暇な時間は乙女ゲーしかしてなかつたし、いじめは関係ないかもしれないけど。

今世の勉強で覚えてるのは、貧乏暮らしをしていた時に通わされた学校に天才とか言われた男の子がいたことね。苦手な歴史はともかく、前世でちよつとはできた数学分野でもあたしはそいつには敵わなくて、本物の才能を見せつけられた気分だつたわ。

まあでも、特に問題なく舞台の王立高等学園に入学したわ。その男の子と関わりはなかつたけど、前世のなけなしのプライドが触発されて勉強にはそこそこ力を入れたおかげなのか入学試験では3位だつたわ。

ゲームでは王太子が1位でヒロインが2位だけど、2位にはアレンつて男の子がいたわ。その時は気づかなかつたけど、よく考えたら

アレンって学校にいた天才君だつて思い出したわ。どうせ平民だし、今の貴族のあたしとは比べる対象にすらならない……とか思つたら、また会う羽目になつたわ。しかも舞台の学園で。

貧乏学校に居たし平民だから入学金が支払えないと思うのだけど、特待生つてあるし特例でも認められたのかしら? といふか、こんな勉強ができるモブなんていなかつたし、幼少期のヒロインあたらしいと接点があるから……もしかしたらDLCで追加されるはずの攻略対象かもしけないわね。

ちよつと、いやかなり気になつたあたしは、入学式の時に隣に座つて話をしてみたわ。この時のヒロインはカール達を遠巻きに見ているだけだつたから、問題はないはずよね。

あたしが話しかけるまで俯いて落ち込んでいたんだけど……ああそう言えば「平民は貴族にはなしかけてはいけない」みたいなルールがあつたわね。Aクラスは平民一人だし、そりや憂鬱にもなるわね。少し同情するわ。

「ここにちはあ。あたし、エイミー・フォン・ブレイエスです。特待生のアレンさんですよね? よろしくお願ひします」

「はじめまして、エイミー様。俺はアレン、平民のアレンです。よろしくお願ひします」

話し方があたしが思う乙女ゲーの主人公を意識して上目遣いで甘い声をだしたが、これが効果的面でアレンが内心かなり取り乱しているのがよく分かつた。取り繕つてはいるが、乙女ゲーで鍛えた観察眼、舐めんじやないわよ。

「ふふ、エイミーで良いですよ。私は元平民ですし、貴族に対する礼もいりませんわ」

「え、えつと……エイミー、でいいのかな。俺のこととも呼び捨てで構いません」

顔は……まあ及第点。少し陰が暗いけど、それ以外はあたしの好みと結構近いわね。他の攻略キャラにも遜色ないくらい。

これでアレンがDLCの攻略キャラというのはほぼ確定ね。コンセプトは貴族と平民の禁断の恋、とかかしら? 個別ルートだと聖女と

駆け落ちルートとかありそうね。ああ：乙女ゲーしたくなつてきちゃつたわ。

ともかく、似たような乙女ゲーの展開は知つてゐるし、ここは貴族側から歩み寄るといいのよね。

「くすくす、敬語もいりませんよお。普通に接してくださいねえ」

「あ、ありがとうございます……ありがとうございます、エイミー」

そう言うと、アレンは露骨に安心した表情を見せたわ。クラスの中に気軽に話せる人ができる嬉しいんでしょうね。まあこのくらい乙女ゲームスターとしてできて当然よ。ついでにと、あたしはアレンの好感度が上がりそうなセリフを言つたわ。

「アレンさん、11才の時に全教科満点で飛び級卒業したんですね。あたし、その時同じ学校に通つててえ、尊敬しちゃいましたあ」

そう言うと、アレン顔を真つ赤にして照れてしまふもどろになつたわ。

チヨロい。

ま、あたしの乙女ゲースキルにかかるばこんなもんよ。

顔もそこそ好みだしせつかくの新キャラだけど、あたしは逆ハールートに進みたいし、余裕があるなら攻略しようかしらね。

「あたしい、ちょっと勉強についていけるか不安でえ。よければ勉強教えてくれませんかあ」

「えつと……俺で良ければ」

約束事を結んで、次のイベントフラグ成立に手答えを感じたわ。前情報があつたし、むしろ選択肢がなくて自由な分楽勝よね。

ま、あたしレベルになれば平民の1人くらい逆ハーハイイベントの空き時間に墮とすなんて余裕に違ひないわね。

そう考えたあたしは、その後もちょくちょくアレンに話しかけ、副次効果で「平民にも分け隔てなく接する優しい貴族令嬢」というステータスを得ることができたわ。

実際アレンは賢くて授業内容を分かりやすく教えてくれるのは案外助かっているし、話すと周りの好感度まで上がるなんて、いことづくめのアレンって相当な便利キャラね。しかも元冒険者らしいし、結

構強い戦力にもなりそうね。加護はもつてなさそうだけど、初期だけ
強いお助けキャラみたいな感じかしらね。

ほんと、乙女ゲーのヒロインつて最高だわ！

町人A、エイミーの態度に困惑する

桜舞う季節、ついに俺は乙女ゲーの舞台である全寮制の王立に入学した。

理由はもちろん、町のみんなを守るために悪役令嬢断罪イベントをぶち壊すこと。そのために今まで準備を重ねに重ねてきた。冒険者ランクも最年少でCになつたし、レベルも37まで上がって、ゲームだとラスボスに挑めるくらいだ。師匠との剣の鍛錬も欠かせていいない。目立ちたくない俺にとって、入学試験では派手な魔法は使えないから剣術が重要だったしな。

ちなみに俺のステータスは【隠密】スキルで風魔法以外全て隠蔽している。平民でレベル37とか怪しすぎるし面倒事は起こしたくない。いくら課金アイテムとは言え気配も消せるし、ほんとこのスキルは便利すぎる。

とはいって、教室で隠密スキルを使うわけにもいかず、目立ちたくない俺は教室に1番乗りしてそそくさと窓際最後尾、通称「主人公席」を手に入れることに成功した。まあ俺自体は平民モブだけどな。

俺のクラスはA。この学院は成績順でAとBの2クラスに振り分けられていて、つまりAクラスはエリートクラスだ。さらに、入試では落とされないよう魔法以外全力で挑んだせいか、俺は平民ながら入試ランディング2位（1位は王太子）を獲得してしまい、原作で2位だったヒロインのエイミーを抜かしてしまった。扱いも「一般（平民）」ではなく「特待生」だ。違いはよく分からぬが。

正直断罪イベントまでは目立ちなかつたし、イベントに介入する気もあまりない。だから別にBクラスでいいんだけど。……というよりBクラスが良かつた。

平民はBクラスには3人、Aクラスは俺1人だけ。この国のルールで平民は貴族側から許可がない限り、こつちから話しかけることはできない。そして貴族は平民なんか眼中にない。

……つまりはぼつち確定である。

確かにぼつちは目立ちにくいんだけど、俺も人間で、学院での青春

を全て諦めたわけじゃない。人並みには友人も欲しいし、友人との学院イベントというのも期待していたんだ。

「こんにちはあ」

俺が絶望を味わつて俯いていると、ふと隣から声が聞こえてきた。顔を上げると、そこには予想外の人物がいた。

「あたし、エイミー・フォン・ブレイエスです。特待生のアレンさんですかよね？ よろしくお願ひしますう」

馬鹿な？ この入学式でヒロインは王太子を見てドキドキしているというイベントのはずだ。ランкиングで抜かしたのもあるし、俺というイレギュラーが狂わせたのか？

「はじめまして、エイミー様。俺はアレン、平民のアレンです。よろしくお願ひします」

とりあえず身体を向け、平民が貴族に対する臣子の礼をしてから俺は平静を装つて返した。しかし、俺は動搖を隠し切れなかつたのか目の前にいるエイミーは可笑しそうに笑つて言う。

「ふふ、エイミーで良いですよ。私は元平民ですし、貴族に対する礼もいりませんわ」

「え、えっと……エイミー、でいいん、いいのですか？ なら俺のこととも呼び捨てで構いません」

「くすくす、敬語もいりませんよお。普通に接してくださいねえ」

最初は思わずぼつちから逃れたことに安堵してしまつたが、ゲームにないエイミーからの予想外すぎる好待遇に、俺は内心でかなり困惑した。ゲームのエイミーは基本的に自分から積極的に話す性格ではないし、おまけに敬語まで要らないと言われ、ただの平民モブの俺になぜそこまでするのか、俺はいよいよ混乱し始めた。少なくとも原作ではこんな展開は無かつた。ゲームだと平民がまずほとんど登場しなかつたが、大抵出ても敵キャラだつたし……。

エイミーは混乱する俺を見てもなお、楽しそうに笑つていて、俺はとりあえず礼を言おうと席を立つて頭を下げた。

「あ、ありがとう……ありがとう、エイミー」

いちいち吃つてしまふ俺に対しても、エイミーは終始笑顔だつた。

か、かわいい……。

さすがは乙女ゲーのヒロインだ。この可愛らしさ、そして平民モードの俺に対等に接する慈悲深さに攻略対象達が落ちるのも無理ない、と俺は思つてしまつた。

……いやいや！でも断罪イベントだけは全力で妨害するけどね！しかし、エイミーってこんな甘つたるい間延びした声だつけ？まあゲームだと口調しか分からぬから判断しようもないけど、そこはイメージとは結構違つたな。

「アレンさん、11才の時に全教科満点で飛び級卒業したんですね。あたし、その時同じ学校に通つてて、尊敬しちゃいましたあ」考え方をしていると、エイミーは顔を少し赤らめ、そしてキラキラした目で俺のことを上目遣いに見つめてくる。男子が憧れるシュチュエーションベスト3に入るだろう光景に、俺は内心で打ちのめされた。

ぐふつ……。これが……乙女ゲーヒロインの力、か……。

攻略キヤラ以前に美少女耐久0な俺が落ちかけている事実に、俺自身が戦々恐々としていると、講師らしき人物が教室に入つて來た。エイミーも気づいたようで、俺はとりあえず思考を整える時間ができそうなことにホツと安堵する。

ところが、エイミーは去り際に追加爆弾を投下していった。

「あたしい、ちょっと勉強についていけるか不安でえ。よければ勉強教えてくれませんかあ」

「えつと……俺で良ければ」

俺は、気づけば反射でそう答えてしまつていた。

ともあれ、こうして俺の学園生活は、早くも大波乱の予感を感じいつもスタートしたのであつた。

町人A、ダイジエストにされる

さて、俺が学院に入学してから1ヶ月程度が経過した。相手は貴族だが友人もてきて、ぼつち生活はなんとか回避することができた。まあ9割方はぼつちなんだけど。だつて友人のエイミーは攻略対象達に大人気だし。

入学初日に話しかけてきたエイミーは、俺というイレギュラーを挟みつつも無事にフラグイベントこなしたようだが、今でも偶にだが俺に話しかけてくれていた。

「アレン、約束は覚えてますかあ？」

エイミーが本当に勉強を教えて欲しいとお願いしてきた時は驚いた。半分くらい社交辞令だつたんじやと思つていたし、エイミーは平民に教えを請うのは嫌ではないらしい。

「元平民同士、仲良くしましようねえ」

「いや俺は今も平民なんだけど」

その後も、授業の合間に分からぬ場所を聞きに来たり、先週なんて短時間だったとはいえ放課後に勉強会を開いたりもした。

だからといって別にキャツキヤうふふなイベントは一切無いが。さすがに平民と貴族だし、そこら辺はちゃんと線引きしている。それに、そういうのは王太子と愉快な仲間達がいろいろイベントを起こしているから、そういう意味でも俺は要らなそうだし。

そして魔法演習授業でのイベント。子供以下の王太子の暴走と、暴走を止めたアナスタシアを邪険に扱いエイミーだけに感謝するというクソほどどうでもいいイベントが起こつた後のこと。

クラスの雰囲気是最悪と言つても差し支えなかつた。

王太子に氣に入られたエイミーに対して、大なり小なりの嫌がらせが行われるようになつた。

相変わらず平民の俺に話しかけてくるエイミーにそれとなく聞いてみたが、エイミーは貼り付けた笑顔で「大丈夫ですよお、慣れてますしい」と言つてのけた。その言葉には妙な凄味というか強がつてゐようで本心のようにも感じて、俺は何も言えなくなつてしまつた。

痩せ我慢なのか本当に平氣なのか、實際どうなのか分からなかつたが、ぼつち学院生活を回避させてくれた恩人に対して俺は影ながら努力することにした。

と言つても出来ることは大してない。平民は貴族に話しかけられないし、「Aクラスの平民がエイミーに取り入ろうとしている」という噂が立つて不必要に目立つのも嫌だつたため、俺ができたのは嫌がらせを妨害するだけだ。

具体的にはエイミーのそばでこそと陰口を話す声を風魔法でエイミーには聞こえないようにしたり、隠密で尾行して隠したエイミーの持ち物を元に戻しておいたりしたが、根本的な解決にはなつてないのは分かつていて、女子寮で起こつたことはどうしようもないし。

でも、一度だけ表立つて嫌がらせを止めてしまつたんだが……、アレは失敗だつたな。あくまで俺の目標はアナスタシアを救うこと、だから目立つことは控えていたのだが、あの時は何故か相手に一言言つてやりたくてしようがなかつた。幸い周囲には誰も居なかつたし、数日間隠密で調査したが広まつてはいなさそうだけど。

まあゲームイベントとは言え、いじめ見ていて気持ちの良いものではない。前世でも高校生の時、周囲でいじめがあつた。俺は殆ど関係なかつたし、気づいたら当事者全員退学していたのだが。もしかしたら、俺が一言言いたかつたのはその時の感情も含まれていたのかもしれないな。

そして隠密スキルで情報収集した限り、嫌がらせの主犯格は予想通りアナスタシアの取り巻き達だつた。大方、王太子がエイミーに奪われそうで焦っているんだろう。俺が嫌がらせを止めたのもその1人だ。

まあアナスタシア自身は嫌がらせには関与していないし、寧ろ真剣に取り巻きを止めようとしているのだが。俺が前世でアナスタシアを好きになつたのはそういう所だ。

俺なら見捨ててしまうような王太子や取り巻きでも、アナスタシアは最後まで説得しようとしていたしな。

それと朗報なことに、エイミーは平民の俺にも差別意識なく接するため、アナスタシア以外にも「善人をいじめるのは気が引ける」と思つてゐる取り巻きもいるようだ。まあ肝心本人の意志が弱いせいで嫌がらせ自体には関与しているのだが。

それからさうに時間は経つて、気づけば夏休み目前に迫つていた。まだルート確定はしていないが、エイミーは順調にイベントをこなしたようで、王太子と愉快な仲間たちに囲まれてすっかりお姫様状態だ。

「アレン、この前の勉強会覚えてますかあ？」

「ああ、うん。覚えてるけど。説明分からないとこでもあつた？」

「いえいえ。前にアレン欲しがつていた小物入れが手に入ったので差し上げますう」

「……えつと、ありがとうございますエイミー」

しかし、エイミーは俺にも変わらずに話しかけくれ、この前なんかは可愛らしい小物入れをプレゼントしてくれた。対価は要らなくて普段勉強を教えてくれているお礼らしい。……まあ俺が欲しがつていたのはエイミーの勘違いなんだけど。嫌がらせで隠されていたエイミーの持ち物を取り返して、こつそりと戻そうとした時に見つかってしまい、俺が慌てて誤魔化したせいである。

勉強も他の攻略キヤラにでも聞けば良いのに、エイミーは相変わらず授業の隙間なんかに俺へ聞きに来ていた。もしかしたら、俺がAクラスで孤立しないように配慮してくれているんだろうか。

さてそんなエイミーだが、教室での会話イベントを聞く限り、順調に逆ハールートを進んでいるようだ。だとすると断罪イベントは確定してしまうが、その為に俺が居るんだし、逆ハールートは難易度の高さから何度もやり直したルートだから行動を読みやすい利点はある。

一旦考えるのを止め、俺は終業式に参加するために講堂へと向かつた。すると講堂の壁に人だかりができており、そこには期末試験のテストの結果が張り出されていた。

まあ詳細はカットするが、1位俺2位アナスタシア3位エイミー

(他だいたい原作通り)とだけ言つておこう。俺は満点、アナスタシアとエイミーも490点を超えてる。他は……だいたい400点くらいに固まってるな。

内容は日本でいう中学生レベルで、王立学院がこのレベルの学習でいいのかと偶に不安に思つてしまふが。まあ魔法学院だし、それに貴族同士で青春してるんだろう。俺は勉強に油断や慢心はしてないし、エイミーに勉強を教えるのは自分の復習にも一役買つていた。特待生という分類とはいえ、平民は平民だし退学はなんとしても避けなければならぬから、これからも全力で取り組むつもりだ。

青春……前世……高校生時代……。はあ、入学したての頃は退学騒ぎでクラス全体が暗かつたし、一時期はクソ姉貴のせいでも乙女ゲームつかやつてたし……。貴族とか身分云々言つても、こつちの方がまだエイミーいるだけマシかなと思つてしまふ。

まあ勉強とか剣術、魔法に関しては現状維持で大丈夫だろう。剣術はともかく勉強は1位だし、魔法はまだ実力はほぼ隠している。剣術も足を引っ張る程ではない。総合的に見て余裕があると言えるな。

不安なのは貴族特有の不正だが、この世界の元が乙女ゲームということを考えるとほぼ100%ないだろう。まあ確証はないが、先生方は俺を平民だからと侮る行為はしないし、入試や期末テストの結果を見る限り大丈夫だと思う。

終業式が終わって教室に帰るとホームルームが始まり、一人一人名前を呼ばれて答案が返却される。俺も呼ばれたので前に行くと、先生は返す時に一言。

「アレン君、君は一人だけ満点でした。我が国の学校制度が始まつて以来の天才と聞いていましたが、その才能を遺憾なく発揮してくれましたね。皆さん、アレン君に拍手を送つてください」

嬉しいんだけど、どーセ貴族様は拍手しないだろ……って思つたらアナスタシアとエイミーが拍手してくれた。釣られるようにクラス全體が拍手を俺に送る。

俺はクラス全員に向かつて深く一礼し、自分の席に戻つた。

それから夏休みの自由研究について説明されるが、内容自由で評価

基準もないらしい。まあ、お偉い様の貴族に平常点を与えるための課題だろう。

とはいって、俺には関係ない。夏休みは悪役令嬢関連のイベントで気になるものは無いし、自由研究もエルフかオーラの迷宮関連の内容を書けばいいだろう。

……と、思つてた時期が俺にもありました。

「おい、アレンといつたな」

はつ、しがなきモブです悪役令嬢様。町人Aとお呼びください。

……

「追つて使いの者をやろう。呼び止めて悪かつたな」

「はつ」

アナスタシアはそれだけ言うと取り巻き令嬢と共に踵を返して歩いていった。

使いの者が来る?

という事は俺、もしかして目をつけられたのか?

とはいって、アナスタシアは身分が低い者には誰だろうとこの口調だ。さつきの答案返却では1位を奪われながらも拍手をしてくれたことから、決して悪くは思われてない……と信じたい。

「アレン? どうしましたか?」

「いや、なんか試験で1位取つたせいか公爵令嬢様に目を付けられたらしい」

次に話しかけて来たのはエイミーだ。話しかけてくれるのは嬉しいんだが……後ろで王太子が凄い目でこっちを見てるのが怖い。

「……アレンは賢いですしい、アナスタシア様に目をつけられるのも納得ですねえ」

「そうか? エイミーも3位じゃないか。この調子なら次は満点狙えると思うぞ」

「ありがとうございます。アレンに言わると嬉しいです。次は、アナスタシア様を超えるよう頑張ります」

ん？エイミーからアナスタシアに対する敵対心を感じ、俺は内心首を傾げる。エイミーはそういう敵対視はしないタイプかと思つていたけど。エイミーも満点取れなかつたのが悔しいのかな。

その後、エイミーが一緒に自由研究しないかと誘つてくれた。俺を1人にしないようにという配慮だろう。もちろん歓迎だつたが、返事をする前に痺れを切らした王太子がエイミーを呼びに会話を中断してきた。「俺はまだ誘われていない」とか「平民が先か」とか煩かつたんで申し訳なさそうな顔のエイミーに「気にしてない」とアイコンタクトを送り、俺は教室から立ち去つた。人気なのは大変だなーと他人事のように考えつつ、夏休みどう過ごうかと俺は思考を巡らせるのだつた。

まあ数日後、使いを通してアナスタシアにも自由研究のグループに誘われて、結局エイミーとも一緒になつたのだから、結果的には同じだつたのだろう。

とりあえず、俺は乙女ゲーの夏休みイベントにモブ枠で参加することが決まつたのだった。

逆ハーヒロイン、町人Aに勘違いする

アレンとの会話イベントというイレギュラーが追加されたけど、その後は他の攻略キャラとも順調にイベントをこなしていくって、きちんと逆ハールートのフラグを立ててあげたわ。そうしたら面白いように攻略キャラはあたしに魅了されて傅いてくれるようになつたわ。

でも、アレンはゲーム通りのセリフじゃないせいか、そんな魅了されている感触はなかつたわね。やっぱDLCの情報が分からぬのが痛手だわ。まあ主観だけど好感度はそれなりつて感じね。

その後ゲーム通り嫌がらせは少しあつたけど、前世で散々いじめられてきたあたしにとつては1ダメージにもならなかつたわ。実害がない分むしろ優しいくらいよ。

それでも、ゲーム内の描写から予想してたのとは違つて思ったより少なかつたわ。意外に思つたけど、まあでも攻略キャラとのイベントは問題なく進んでいるから特に気にしなかつたわ。

でもこの前、少しごつくりしたことがあつたの。放課後、アレンと勉強会を開く約束をして、ついでに嫌がらせの犯人探しのために少し教室を離れて見張つていたのよ。そしたら、案の定あたしの持ち物に近づく女子生徒が現れたわ。まあこの女との会話イベントはゲームでも必要だつたし、あたしは偶然を装つて教室に入ろうとしたんだけど、驚いたことにアレンがその女を止めていたのよ。

ちよつと前に、アレンもあたしが嫌がらせを受けているのを知つているようで、「最近何かあつた?」つて遠回しにだけど他の攻略キャラと同じように心配した声をかけてきたの。だからあたしも同じように「大丈夫ですよ。慣れてますしい」つて返したのよ。

そう言うとカール達は大なり小なり気遣う声をかけてくれて、犯人探しをしてくれたり好感度が上がつたりするんだけど……アレンは「そつか」の一言だけだつたのよ。それ以降、アレンは何も聞いてこなくなつたわ。アレン関連のイベントなんて事前知識もないし、選択肢間違えたんじやないかと思つたわ。まあアレンは平民だし、貴族同士のいざこざには関与したくないのかもしけないけど。

今考えたら、その会話の後から妙に嫌がらせが減っていたのよね。

悪口が聞こえる回数が減つたり、無くなつたと思つていた物がいつの間にか戻つてきたりとか。もしかしたらアレンがこつそりと止めてくれたんじやないかと思うわ。

あの時も、アレンはその女が持つていこうとした物を無言で手に取つて止め、貴族令嬢であるアナ斯塔シアの取り巻きに対しても怯えず毅然とした態度で接してわ。

「な、なに？ 平民のくせに邪魔する気？」

「……友人を守るどこがいけないのでしょうか」

「あんた、もしかして恩を売つて取り入ろうとしているの？ あの女は辞めておいた方が」

「そういう貴方は、アナ斯塔シア様を利用して王太子に取り入ろうとしているのではないですか？」

「……つつ!?」

取り巻きを途中で遮つてアレンのセリフに息を飲んだのは、取り巻きだけでなくあたしもだつたわ。

正直に言うと、あたしはアレンのことを侮つていたのよ。平民だけど、賢くて魔法と剣術が少しできるから学院に特待生として入れたんだろうから、こういう貴族間のトラブルは疎いと思つていたのよ。クラスでも目立たないようになつてしまつた。でも実際はその真逆で、アレンは自分の立場をよく分かつているのよ。不干渉だつたのは……たぶん、あたしのためね。

きっと平民のアレンは、貴族のあたしとの間に変な噂が立たないようしているんだわ。恐らく、アレンは他の攻略キャラと違つて影ながら助けようとしているのね。

これはアレンの攻略フラグは立つていると言つても過言じやないわね。だつてあたしの事を第一に考えているし、普段控えめなのも実は惚れていて、身分の差に嘆いているんじやないかしら。そうに違ひないわ。

それにもう、あの時のアレンの横顔は格好良かつたわ。声も普段からは想像できないくらい冷たかつたし、凄く頼り甲斐がある声だつ

たわ。あれはDLCで追加されたイベントなのかもしれないわね。もしそうならいつもの照れたアレンとのギャップもあって、かなり良いイベントだと思うわ。

言われた相手も、アレンの思わず反撃に言い返すことも出来ずに逃げていったわ。逃げる途中であたしとすれ違ったんだけど、目が合うとかなり怯えた表情をしていたわ。ふふ、今のは話を聞いたあたしが王太子に密告されるのが相当怖いんでしょうね。いい気味だつたわ。

アナスタシアの取り巻きの姿が消えた後、あたしは何事もなかつたように教室に入ったわ。アレンは疲れたような表情をしてため息を吐いていたのだけど、その手には未だ私の持ち物を持っていたのよ。あたしに気づくと慌てて元に戻していたけど、あたしが見逃すわけないでしよう？

「えーっとお、アレンさんあたしの小物入れ欲しいんですかあ？」

「あ、いや、そーじゃなくて。えっと、ごめん」

さつきまでの泰然自若な佇まいとは打って変わつて羞恥心で頬を染めて謝るアレンに、あたしはギャップ萌えをしてしまつたわ。今までツンデレとかクーデレにはさほど興味なかつたけどね。これは実物を見たら考えを一変するものよ。

「いいですよ。今度お揃いの物を差し上げますう」

「あー、うん……ありがとう」

ふふ、この様子だとアレンの逆ハーレム入りも確実かしらね？

それから他の攻略対象者含めてイベントはゲーム通り順調に進んで夏休み直前になつたわ。夏休みもいくつか個別イベントがあるけれど、1番大きいのはやっぱ迷宮探索イベントよね。逆ハールートだとアレン以外の5人からは確実に誘われるんだけど、アレンだけはよく分からぬわ。

平民だからつて遠慮してしまうかもしないし、彼はあたしが誘つておかないとないね。で、先ずは終業式を受けるために講堂に向かつたわ。そしたら期末試験の成績一覧が貼られていたのよ。ゲームではヒロインが1位で悪役令嬢が2位なんだけど、やっぱり1位はアレンだつたわ。あたしも想像以上にできていたのだけど、悪役令嬢の

点数も予想外に高くて僅差で負けてしまったわ。

そして終業式とホームルームも終わって、アレンが帰ってしまう前に話しかけようとしたら……先に悪役令嬢のアナスタシアがアレンに話しかけていたの。

……期末試験で興味を持ったのかしら？ 悪役令嬢がカール様以外に話しかけるシーンなんて見たことないし、目的が分からないわ。点数もあまり下がつてなかつたし、少し警戒する必要がありそうね。

アナスタシアは、あたしのとつては嫌がらせをしてくる奴らのトップで、前世のいじめつこのリーダーみたいなものよ。だから、断罪イベントで前世の分も纏めて報復してやるつもりよ。そうしないところの世界に転生した意味がないもの。

しばらくしたら、ようやくアナスタシアがアレンから離て行つたわ。ようやくアレンと話すことができるわね。

「アレン？ どうしましたか？」

「いや、なんか試験で1位取つたせいか公爵令嬢様に目を付けられたらしい」

どういうことだろうか？ 平民のアレンを取り込もうとしているのかも……それだけは何としても阻止しないと。

「……アレンは賢いですしい、アナスタシア様に目をつけられるのも納得ですねえ」

「そうか？ エイミーも3位じゃないか。この調子なら次は満点狙えると思うぞ」

「ありがとうございます。アレンに言わると嬉しいです。次はあ、アナスタシア様を超えるよう頑張ります」

「そうよ。今度こそアイツを超えてアレンから遠ざけてやるんだから……」

「エイミー、そろそろ行かないか」

そして、本来の目的である自由研究を一緒にやらないか誘おうとしたら、背後からカール様に話しかけられたの。

「カール様あ、分かりましたあ。でも、ちょっとアレンに話したいことがあります」

「自由研究か？そういうえば、俺はまだ誰にも誘われていないと。エイミー、この平民を先に誘うわけではないだろう？」

……どういうこと？ カール様が嫉妬深い性格なのは知ってるけど、そうなるのは2年生以降のはずよ。他の攻略キャラと話しても何も言わないのに……とりあえずは2年生のイベントと同じセリフで切り抜けよう。

「もちろんです、カール様を最初に誘うつもりでしたあ」

「そうか、——ならないんだ」

あたしがそう言つたら笑顔になるカール様。だけどアレンは、チラつと視線を向けたら顔を俯けて去つてしまつたわ。アレンは平民寮だから、夏休み中に会えるチャンスなんて限りなく0だし……。仕方ないわ、アレンの夏休みイベント参加は諦めるしかなさそうね。

でも、どうしてカール様は会話を妨害してたの？ 平民のアレンだから？ ……こつちも少し考える必要があるわね。とりあえずは夏休みイベントを満喫しましょ♪

悪役令嬢は平民に目をつける

優秀な平民もいる、頭ではそう理解してるつもりだつた。

だが、高等学園の入学日に入試の席次を見た時には随分と驚いたものだ。何しろ平民と元平民が2位と3位にいたのだから。

我が公爵家の者が調べたところ、2位の男の方はアレンと言い、かなり貧しい地区の母子家庭に生まれのようだ。

幼いころから相当な苦労をして育つたが、史上最年少の飛び級で平民向けの学校を卒業し、さらには冒険者として荒事も経験しているらしい。

3 位の女はエイミーと言い、どうやらブレイエス男爵の落し胤だねで、それなりの援助が男爵家から行われていて人並みの生活は送つていたようだ。

加えて、【癒し】の加護を持つていることが分かり、急遽ブレイエス男爵家に母親ともども引き取られたという経緯らしい。

これらを総合的に考えると注意すべきは 2 位のアレンのほうだろう。貧しい家庭の出で冒険者など、普通に考えればこの高等学園に入学しようなどと考えるはずがないし、そもそも金銭面からできるはずもない。

我が公爵家の者が調べたところによると、アレンは幼いころから目利きが良く、露商店で二束三文で売られている魔道具を見つけ出してギルドで売却する……という行為を繰り返していたらしい。それも【鑑定】などの加護やスキルが一切ないにも関わらず、だ。

入学金を全て稼いだのではないかとも知れないが、それでも最底辺の身分でありながらも莫大な入学金を払えたのは称賛に値するだろう。成績に違わず優秀なようだが、裏があるかも知れない。当分は様子を見て注意しよう。

この高等学園には殿下をはじめとして隣国の王子や多くの貴族家の子弟が通う。そこで万が一のことが起きてはならないからだ。

二重の意味で、この男には細心の注意を払つておく必要があるだろう。

私は入学式の行われる講堂に友人たちと入場すると、最後列の隅の席に座るアレンをちらりと確認する。

こぎつぱりとしてはいるが茶髪に茶色の目、どこにでもいる普通の平民だ。怪しさは見て取れない。

この平民がもし裏がなく本当に優秀な人材なら、卒業後に公爵家に雇い入れても良いかもな。

私がその平民を盗み見ている間、当の本人は何故か俯いたままだったが、私は視線に気付かれる前に着席することにした。私の席は最前列の殿下の隣だろう。殿下がいらっしゃる前に確保しておこうか。

……入学から一週間ほど経つた。

私は間違っていた。危険なのはアレンではなく女のエイミーのほうだった！ お互いに愛のない割り切った政略結婚とは言え、王太子殿下は私の婚約者だ！

それをベターベターと！

いくら学園の中とは言え、物事には限度というものがある。まだ殿下に話しかける許可すら得ていないので自分から声を掛け、そして二言目には甘えた声で「カール様あ」などと言うとは。あの女は娼婦か何かだ！

しかし殿下は殿下でそれをお許しになり、諫める私の言葉には耳を傾けてさえ下さらない。

このまま殿下があのような女に誑かされ、骨抜き肉抜きにされてしまっては国が乱れてしまうだろう。エイミーの目的は不明だが、そうなつた時にそのしわ寄せはやがてアレンのような民へと向かつてしまふのだ。

平民からの優秀な人材を失うだけでなく、貴族として民の税金で恵まれた生活をしているのだから、私にはそれに対する責任がある。

誑かす方にも問題はありそうだが、エイミーの真意は定かではない。ここはやはり我慢強く、婚約者として殿下に諫言し続けるしかないだろう。

大丈夫、殿下だって愚か者ではない。根気強く説得すれば理解され

るはずだ。

最初はそう思っていた。だが私の思いとは裏腹に事態は悪い方へ悪い方へとコロコロ転がつていつてしまう。

初めての魔法演習の際、殿下は私に対する対抗心から魔力を暴走させ、エイミーに治療された。

……ここまでまだ良い。しかし、その後殿下は私の諫言を無視し、エイミーに対して甘言を掛けるばかりだった。

……だが、唯一の救いなのはエイミーが殿下しか目に映らないような盲目者ではないことだろう。

今やエイミーは殿下だけでなく、複数人の男と仲を深めているが、その内の1人はあの平民のアレンであった。ある放課後には、2人一緒に勉強を励む姿が見られた。

元平民同士ということで気があつたのかもしれないが、エイミーは王妃の座を狙っているわけではない? とすると、エイミーは何の目的で殿下に近づいている……?

全く分からぬ。それが私の結論であり、結局何とかしようと焦りばかり募る。

そんな私の焦りは他所に、物事はさらに悪い方向へと転がっていくのだった。

* * * *

その後、案の定ではある、があの女への嫌がらせが始まつた。私の周囲で友人が勝手に忖度して嫌がらせに加担しようとしていたのはやめさせた。友人以外の他の者にも注意したが、それでも嫌がらせは止まらない。

クラスの雰囲気は最悪となり、それを何とかしようと手を回すがどちらも空振りに終わり、徒労感ばかりが蓄積していく。当のエイミーは嫌がらせを何の気にもしておらず、殿下らや平民と話す姿も相変わらずだ。

気疲れが増え、見回りによつて勉強時間が減つたのが原因か、期末

試験では満点を逃してしまった。ケアレスミスで選択肢を一つ間違えていた。またエイミーも490点を超えており、ほぼ私と同じ点数だ。

自信があり、平民のアレンには1位を奪われ、はつきり言つてプライドが大きく傷ついたが、それと同時に私は深く反省した。

勉強をするためにこの高等学園に入学したのに、それを疎かにしてまで殿下とエイミーの嫌がらせの事を何とかしようとあれこれ構つていたからこうなつたのだ。

最悪な環境の中、この平民のアレンは黙々と努力を積み重ね、またエイミーとも勉強会を開き、切磋琢磨していたではないか。そして見事に1位の座を取つて見せたのだ。

それに比べて私はなんと愚かだつたことだろう。しようもない事に時間を捨てて、点数まで失つた。

そうして心から反省した私は、彼が教師にクラスメイトの前で表彰された時も素直に拍手することができた。

そう、色々と難しく考えていたことがとてもシンプルな話に思えてきたのだ。

まずは勉強に集中する。それで良いではないか。

元々殿下とは愛のない政略結婚だ。そして王族と男爵家の庶子では身分差を考えると結婚は不可能だ。ならば殿下の火遊びは放つておけばよい。最初から心を碎く必要すら無かつたのだ。

そうしてすつきりした私は夏休みの自由研究について考える。もともと貴族に対する加点目的の課題であるから内容は何でも良いだろうが、さすがに私が殿下と共同で行わないというのは色々と問題がある。ならば殿下の行きたがつていた遺跡に行くのが良いだろう。

とすると、冒険者のガイドがあると心強い。公爵家の私兵でも良いが、遺跡は不慣れだろうし、家の力を利用したと思われかねない。それに我がクラスにはちょうどいい人材がいる。ついでにどれだけ優秀か確認できるではないか。

そう思い至つた私はアレンに声をかけたのだつた。